

新建・寺子屋 (モダニズムの研究) 255 報告

近代建築を多角的に検討／モダニズム建築文献再読；

2018.9.19

—藤森著『日本の近代建築』の分析—第 21 回

話：三沢浩

A・レーモンドの戦中・戦後のモダニズム、特にRC造の方法論(スライド第 16 回)

■ 寺子屋 255 は 6 人の参加で開催されました。

■ RC造のように強い自律性を持つ建築を考える場合、通常の「建築的」思考であれば建築単体としての独立性、独自性を考えようとする。しかし、レーモンドのRC造は常に環境の中に置かれたなかで統一体として検討されながら、思考と試行を繰り返しています。

■ それは、単に緑を従属させた景観上の見た目ではなく、人が内部と外部を移行する時にRC架構がどのような意味を持つのか、あるいは、内と外を繋げたり閉じつつ開く関係をつくり出していくために、たとえばシェルや折版構造にはどのような可能性があるのか、といったことの試行錯誤の軌跡とみることもできそうです。

新建・寺子屋(モダニズムの研究)255

2018年9月19日(水) 話：三沢浩

近代建築を多角的に検討／モダニズム建築文献再読；

—藤森著『日本の近代建築(上、下)』の分析—第 21 回

A・レーモンドの戦中・戦後のモダニズム、特にRC造の方法論(スライド第 16 回)

1. 前回のXVスライドへの補足

- 1) 戦時中のアメリカでRC造の理論に気付く
- 2) ワイドリンガー(構造家)の幅広い知識と手法
- 3) それを戦後の日本にいかにか持ち込んだかの細部(ヤマハ他)

2. 今回のXVIスライドの要点

(藤森の著書の内容を越えて)

- 1) 太平洋戦争中、A.Rはアメリカで仕事
 - 2) 末期には構造のワイドリンガーから示唆をうけている
 - 3) 1948年にA.Rは再来日してRC造を進めた
 - 4) RD社、八幡体育館にはワイドリンガーのヒントが冴えた
 - 5) 東京で営業、一貫設計でRC造の方法論をかためた
3. RC造のラーメンからシェルなどの新しい方向へ
- 1) 1950年代のRC造の教会から折版の構造へ
 - 2) 1961年に完成した「群馬音楽センター」に折版の集大成
 - 3) 折版の次にシェル、HPシェルの架構を主張した
 - 4) ラーメンのRC造の住宅の次は、直線のない「プライス邸」の方向へ
 - 5) 「南山大学キャンパス」には様々なシェルが使われた
4. 新たなプロジェクトは未完成のまま残されている
- 1) 中でも大きな計画は「高崎哲学堂」「ハワイ国際センター」
 - 2) 「聖アンドリュース・カテドラル計画」は「シカゴ教会案」の延長
5. 関連スライド上映 (藤森の著書は戦後のモダニズムにふれていない)

南山大学



次回 <寺子屋 256> ■近代建築を多角的に検討■モダニズム建築に関する著作再読

藤森照信著『日本の近代建築』の研究—第 22 回

話：三沢浩

日本の初期モダニズムとアントニン・レーモンド 第 17 回

2018年10月24日(都合により第4水曜日に変更します) PM 7:15~

場所：未定(メールでお知らせします)

会費：400円 問合：大崎元 (有)建築工房匠屋 VED03705@nifty.com